

学習に関する自己効力感が児童に与える心理的影響
—動的学校画(Kinetic School Drawing)の描画特徴の比較から—

人間教育専攻

臨床心理士養成コース

山西 健斗

指導教員 小倉 正義

1. 問題と目的

児童の心理的発達や集団適応を考えるうえで学習の問題は非常に重要である。小学校での学習は学年ごとの積み重ねであり、特に低学年における学習のつまづきは、その後の学習理解に影響するだけでなく、学習意欲や自信の低下など二次的な問題につながる可能性が指摘されている(堀部・別府, 2005; 田中・福元・岡田・小倉・畠垣・野邑, 2011)。学習に対して困難を抱える児童(以下、学習困難児)は、限局性学習症を含めた発達障害、家庭環境や学習環境の問題などさまざまな背景が考えられるが、できる限り早期に困難さを発見し、児童の学習上の特性に合わせた支援を行うことが二次的な問題を防ぐ上でも重要になる(中村, 2010)。

学習に関して、石田(2009)や石田・吉田(2015)の研究では、学習と学校適応感との関連が示されており、学習に関する自己効力感(Academic Efficacy: 以下、AEと記述)に着目した研究が多くなされている。

一方で、小学校低学年児童の調査対象が少ないことや、量的な側面のみで検討されているといった課題も残されている。

そこで本研究では、小学校低学年児童を対象に含め、学習に関する自己効力感の質問紙調査と投映法の一つである動的学校画(以下、KSD)を用いて、学習に関す

る自己効力感を多面的に検討するとともに、学習に関する自己効力感が児童に与える心理的影響について考察する。

2. 方法

2016年の10月から11月にかけて、A県内の公立小学校2校の1年生から6年生までの児童166名を対象に、授業時間内に森・福元・岡田・小倉・畠垣・野邑(2014)の学習に関する自己効力感尺度及びKSDを集団式で実施した。

動的学校画の教示は「あなたが学校でクラスのみんなど何かしているところをかいてください。かくときには、あなたとあなたの先生、そしておともだち(2人以上)をかいてください。かくときには人のからだ全体をかくようにしてください」とした。また、同一時間内に、「この絵は学校で何をしているところの絵ですか?」、「絵の中でこのあと何が起こりますか」という自由記述式の2項目を画用紙の裏に書くように求めた。

KSDのスコアリング基準については田中(2009)のスコアリング基準を用い、身体描画などのカテゴリ変数は順序尺度として、人物像の大きさなどの量的変数は間隔尺度として取り扱い、KSDのスコアリングに用いた。

研究上の倫理的配慮として、研究協力

の依頼に際し、研究の趣旨について文書及び口頭で児童に説明を実施した。また、保護者には研究の趣旨について文書で周知を行った。

3. 結果

質問紙に欠損値のあったデータ及び描画のされていないデータ計14名分のデータを除外したうえで、学年段階(低学年・高学年)の2群において、学習に関する自己効力感の高低(AE低・AE高)により、層別化を実施し(低学年・AE低群, 低学年・AE高群, 高学年・AE低群, 高学年・AE高群), それぞれの群における描画の出現率の比較を χ^2 検定及びFisherの直接確率検定により行った。その結果、先生像の大きさ、身体パーツの欠損の有無、眼の描画、自己像の顔の向き、及び絵の非統合性において出現率の差が示された。

残差分析の結果、低学年・AE低群で、正面向きの自己像及びやや大きい先生像の描画の出現率が高く、横向きの自己像の出現率が低いことが示された。低学年・AE高群で、省略のない自己像、瞳のある眼、大きい先生像、及び統合的な描画の出現率が高く、省略された自己像、眼のない描画、小さい先生像、及び中立的な描画の出現率が低いことが示された。さらに、高学年・AE低群では、省略された自己像、眼のない描画、後ろ向きの自己像、小さい先生像及び非統合的な描画の出現率が高く、省略のない自己像、瞳のある眼、正面向きの自己像、及び統合的な描画の出現率が低いことが、高学年・AE高群では、非統合的な描画の出現率が低いことが示された。

4. 考察

本研究の結果として、先生像の大きさ、身体パーツの省略の有無、眼の描画、自己像の顔の向き及び絵の非統合性といった描画特徴において、学年段階及び学習に関する自己効力感の高低における出現率の差が示されたことから、学習に関する自己効力感についてKSDを用いたアセスメントの有効性が示され、先行研究と同様に学習に関する自己効力感が児童の学校適応感や一般的な自己効力感に影響を与えている可能性が示唆された。

特に、低学年・AE高群及び高学年・AE低群において、出現率の差が示された描画特徴が多く、勉強に対する得意さや苦手さがよりKSDに反映されたと考えられる。また高学年・AE低群では、学習に対する苦手さだけでなく、学習意欲や自信の低下といった二次的な問題がKSDに反映されている可能性も示唆された。

一方で、①学習に関する自己効力感以外の要因が描画に反映されている可能性があること、②KSDのチェックリストの過不足のため、描画内容をより詳細に検討できなかったこと、③横断研究であるため、児童個人内での学習に関する自己効力感の働きを検討できなかったことといった課題も挙げられた。

今後の研究では、児童の学習に関する自己効力感をより豊かにとらえるためにはKSDをどのように実施すればよいか、また、一人一人の児童に合った援助につなげるにはどのような描画特徴に注目する必要があるか、教師など日ごろから児童に関わる者が評定しやすい描画特徴は何かについて検討する必要がある。